

O1-006

親子の絆づくりプログラム「赤ちゃんがきた！」は初めて子育てをする母親に対して効果的な子育て支援である

原田 大輔¹、木村 美貴子²、宮地 加奈²、
阪本 夏子¹、柏木 博子¹、澤井 真里²、
鈴木 志帆²、北林 愛理²、中野 美佳²、
福永 花子²、福田 綾³、難波 範行¹

¹ 地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 小児科

² 地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 看護部

³ 地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 産婦人科

【背景】

「親子の絆づくりプログラム赤ちゃんがきた！」(BP: Baby's Program) は、初めて0歳児を子育て中の母親を対象に作成された、本邦唯一の参加型子育て支援プログラムである。BP では子育ての「仲間づくり」と「知識学習」を併用して育児不安の軽減と親子の絆づくりを目指す。JCHO大阪病院は多数の分娩を扱う地域の中核病院であり、2012年から周産期関連の医師・保育士・看護師が連携してBPを定期開催している。BPは全国の行政単位で導入が進んでいるが、総合病院での導入例はない。今回その効果を検討したので報告する。

【方法】

2014年11月から2017年9月までのBP参加者276組を対象にアンケートによる追跡調査を実施した。また、BP不参加の母親にも乳児期後期に同様のアンケートを行った(コントロール)。BPの参加前後の比較、参加半年後とコントロールの比較により、BPの短期効果と乳児期後期における効果をそれぞれ検討した。統計学的解析は χ^2 検定およびt検定で行い、 $p < 0.05$ を有意と判定した。

【結果】

BP参加者の大多数が「参加してよかった」(99.2%)、「BPが育児不安の解消に役立った」(99.3%)と回答した。仲間づくりの評価として「子どもの月齢に近いママ友」は参加後に増加し($p < 0.01$)、BP参加者は乳児期後期になってもコントロールに比べて多かった($p < 0.01$)。育児知識の評価として「動画を見せる時間」と「就寝時間が不定」が参加後に減少し($p < 0.01$)、乳児期後期にはコントロールに比べてBP参加者の「動画を見せる時間」が少なく($p < 0.01$)、「就寝目標時間」が早かった(20.7 ± 1.4 時 v.s. 21.1 ± 1.0 時、 $p < 0.05$)。

【考察】

BPは短期的にも乳児期後期においても母親の「仲間づくり」と「知識学習」に成功し、育児不安を解消したと考えられる。またBPは現代の母親のニーズに合ったプログラムであることが示唆され、今後多くの母親が参加することにより、子育て環境が変化することも期待される。

O1-007

食べ方個別相談を利用した乳幼児と保護者の実態調査

高橋 摩理¹、富田 かをり¹、内海 明美¹、
矢澤 正人²、関谷 紗央里²、五十嵐 由美子³、
宮内 恵⁴、平川 知恵⁵、島村 あみ⁶、弘中 祥司¹

¹ 昭和大学歯学部 スペシャルニーズ口腔医学講座 口腔衛生学部門

² 新宿区健康部健康づくり課

³ 新宿区健康部牛込保健センター

⁴ 新宿区健康部四谷保健センター

⁵ 新宿区健康部東新宿保健センター

⁶ 新宿区健康部落合保健センター

【目的】

平成27年度乳幼児栄養調査において、食事で困っていると回答した保護者は約80%であり、食への関心が大きいと想像される。東京都某区保健センターでは食事に対する不安を持つ親子を対象に、食べ方個別相談を平成20年より行っている。これまでの報告から、食べ方相談を利用した乳幼児の食事の問題は、機能よりも保護者の食事に対する気持ちや食形態等の影響が大きいと思われた。今回食べ方個別相談を利用した乳幼児を対象に、食事に関する保護者の不安の実態と摂食機能の発達を明確にして関連性を検討することで、子育て支援の一助とすることを目的に本研究を行った。

【対象と方法】

対象は平成23年度から28年度に、東京都某区保健センターが実施している食べ方個別相談を利用した定型発達している乳幼児とその保護者のうち、摂食場面を観察できた420名(男児222名、女児198名)である。歯科医師による保護者への問診後、対象児が実際に摂食している場面を観察し記録した。対象児を月齢で離乳前中期(5~8ヵ月)32名、離乳後期(9~11ヵ月)102名、離乳完了期(12~18ヵ月)166名、乳臼歯萌出前期(19~23ヵ月)52名、同後期(24~35ヵ月)53名、乳歯列完了期(36ヵ月以上)15名に群分け、相談記録と摂食場面記録の内容について検討を行った。

【結果と考察】

主訴は噛まないが各月齢で最も多かった。溜め込み、時間がかかるは乳歯列完了期に向け増加し、月齢によって相談内容に差がみられた。摂食機能から、押しつぶしは離乳後期で9割が獲得していた。すりつぶし、前歯咬断、水分のすすり飲みを8割以上獲得できた時期はそれぞれ、乳臼歯萌出前期、同後期、同前期であり、この時期に摂食機能が習熟すると推察された。捕食は月齢に関係なく1~2割が獲得できず、介助法などが影響している可能性が考えられた。一方詰め込みは月齢があがるにつれ増加していたことから、自分で食べる機会が増えることにより一口量の調整が困難になると推察された。萌出歯数と有意な相関がみられた項目は、すりつぶし、前歯咬断、水分のすすりのみであった。萌出歯数と摂食機能の間に関連がみられたことより、口腔内の評価も重要と思われた。定型発達している乳幼児においても、離乳完了期以降に機能を獲得する幼児も存在し、保護者の不安につながっていると考えられた。食べ方について個別に相談できる場を確保することは子育て支援を行う上で有効であると思われた。